

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：32697

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00068

研究課題名（和文）日本中世における三論宗の思想的展開に関する研究 論義関連資料を中心に

研究課題名（英文）Research on the Intellectual Development of the Sanron School in Medieval Japan: Focusing on the Materials Related to the Debates (Rongi)

研究代表者

田戸 大智 (Tado, Taichi)

国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・講師

研究者番号：10726847

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：日本の三論宗は、院政期以降、吉蔵の教学だけでなく、浄影寺慧遠の教学を修学することに重点を置いていた。特に、『大乘義章』は三論宗の基本文献として認識され、「法勝寺御八講」では『大乘義章』の学説が吉蔵の学説よりも論義の主題となることが多いことを指摘した。また、三論宗の論義を集めた『恵日古光鈔』に検討を加え、論義の一部が珍海まで遡求できることを明らかにした。

さらに、日本の三論宗が空海の流れを継承する東密学派と関係性が深いことに注目し、新義教学の大成者である頼瑠が真空より密教だけでなく、三論宗の教学、特に『大乘義章』を積極的に修学していた実態を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本仏教では、院政期以降、論義という対論形式による教学研鑽が隆盛となった。論義は教学を深化させる基盤として、常に日本仏教の底流に伏在しながら南都北嶺は勿論のこと、真言宗の教学発展等に寄与している。近年の論義研究では、ようやく教学的視点から論義内容の検証が行われるようになったが、三論宗の論義は法相宗や天台宗に比べ研究が立ち遅れていた。

今回の研究では、新出資料にもとづいて、浄影寺慧遠の教学が重視され、吉蔵の教学と互いに補完するような関係にあったことを解明し、研究の道筋をつけた。また、三論宗の論義が密教寺院で兼学された実態を踏まえ、真言宗との連動性に注目する必要があることを具体的に検証できた。

研究成果の概要（英文）：During medieval Japan, the Sanron School placed emphasis not only on the teachings of Jizang but also on studying the teachings of Jingyingsi Huiyuan since the Insei Period. Particularly, The Dacheng Yizhang was acknowledged as the fundamental scripture of the Sanron School. It was observed in Hosshoji Mihakko that the doctrines of The Dacheng Yizhang are discussed more frequently as the main topic of the debates than the teachings of Jizang. Furthermore, an examination was conducted on The E'nichi Kokosho, a compilation of the debates of the Sanron School.

Furthermore, attention was given to the profound relationship between the Sanron School in Japan and Shingon Esoteric Buddhism, which inherits the lineage of Kukai. An analysis was carried out on the activities of Raiyu, a prominent figure in the Shingi Shingon School, who actively studied not only Esoteric Buddhism from Shingu but also the teachings of the Sanron School, particularly The Dacheng Yizhang.

研究分野：仏教学

キーワード：論義 三論宗 大乘義章 大乘義章抄 恵日古光鈔 慧遠 寛信 頼瑠

1. 研究開始当初の背景

三論宗は、南都六宗の中で最も早く日本に伝来し、法相宗とともに大きな影響力を持った学派であった。日本への伝承や奈良期学僧の思想をめぐっては、平井俊榮氏(『南都三論宗史の研究序説』『論集奈良仏教1』雄山閣出版・1994)や伊藤隆壽氏(『三論宗の基礎的研究』大蔵出版・2018)、末木文美士氏(『元興寺智光の生涯と著述』『仏教学』14・1982)等の研究によって、その概要を知ることができる。

本研究で問題としたのは、院政期以降、論義が法会の中核的な役割を担い、それにともなう教学研究が高揚した時期に、三論宗でどのような思想的展開があったかという点であった。同時期における法相宗の論義を例に挙げれば、楠淳證氏を中心とした研究(『日本唯識の転換点 蔵俊・貞慶と法相論義』『南都仏教』95・2010、「蔵俊撰『仏性論文集』の研究」法蔵館・2019、「貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究 仏道篇」法蔵館、2019等)により着実な業績が既に提示されている。これに対して、三論宗の論義については、大屋徳城氏(『鎌倉室町時代の三論研究(未定稿)』『日本仏教史論攷』国書刊行会・1989)や平井俊榮氏(『平安初期における三論・法相角逐をめぐる諸問題』『駒澤大学仏教学部研究紀要』37・1979、「鎌倉時代の三論教学」『金沢文庫研究』269・1982)等の研究で概要が示され、その後、永村眞氏の聖教研究(『中世寺院史料論』吉川弘文館・2000、「鎌倉時代と東大寺三論宗 三論聖教「春花略鈔」を通して」『史叢』40・1999)により、東大寺が所蔵する未知の論義資料がはじめて紹介された程度の研究状況にあり、本格的な検証が進んでいない領域であった。

研究代表者は、勸修寺法務として名高い寛信(1084~1153)がまとめた身延文庫蔵「大乘義章抄」13帖をはじめ、新たに発見した論義資料の解説をとおして、三論宗が密教との兼学化を背景に、浄影寺慧遠(523~592)の主著とされる『大乘義章』を修学対象とし、特に院政期以降、三論宗の一大拠点である東大寺は勿論のこと、醍醐寺、仁和寺、勸修寺等の密教寺院で『大乘義章』が学究された様相をはじめ具体的に明らかにした(田戸大智『中世東密教学形成論』第五部、法蔵館・2018)。

上記研究の要点は、院政期以降の三論宗で、吉蔵(549~623)の著作だけでなく、『大乘義章』が主要文献として重視されていた事実、その担い手である学僧が、三論宗と密教との兼学を積極的に推し進めていた事実、という2点に集約される。この2つの要点を基盤として、さらに東大寺等に所蔵される論義資料を調査することにより、院政期以降に展開した三論宗を包括的に検証する必要があると考えた。

2. 研究の目的

研究の目的は、以下の2点に大別される。

(1) 院政期以降、東大寺を拠点とする三論宗では、吉蔵の著作類や『大乘義章』から論題を抽出して論義し、寺内法会の中で学僧の自己研鑽を促した。さらには、僧階の昇進とも関連がある、対外的かつ格式の高い勸会(法勝寺御八講・興福寺維摩会等)でも、同様の論題が天台や法相の諸宗との間で問答され、出仕した学僧により三論宗の教学的特色が喧伝された。

しかしながら、そうした歴史的変遷は推認されるものの、様々な法会で吉蔵教学あるいは『大乘義章』のどのような点が問題視されているのか、具体的に何が議論されているのか、現存する論義資料の内容比較を踏まえての包括的研究は、全く行われてこなかった。

そこで、『大乘義章』関連の論義資料、および東大寺等に所蔵され未開拓、あるいは概要しか知られていない三論宗関連の論義資料を併せて解説し、比較対照することにより、院政期以降における三論宗で、どのような教学上の課題が議論されていたのかを解明することを目指した。具体的には、新出資料である身延文庫蔵「大乘義章抄」13帖の解説を基盤としながら、三論宗の論義関連資料との比較考証を行い、南都北嶺双方にて『大乘義章』がどのように位置づけられていたのかを究明することにした。さらに、これまで概要しか紹介されていない、三論宗の論義の集大成である『恵日古光鈔』10帖に焦点を当て、教学的視点から内容分析を試みることにした。

(2) 奈良時代以降、三論宗では密教を兼学する萌芽が生まれ、空海(774~835)の孫弟子である聖宝(832~909)が東大寺東南院を三論宗本所と位置づけたことにより、兼学の方向性が常態化した。つまり、三論宗は真言密教、すなわち東密学派と表裏一体の関係にあり、換言すれば、三論宗は東密学派に併呑される形で修学されていたのである。

東密では、新義学派の中核的学僧である頼瑜(1226~1304)の頃より真言教学の問題点が整理され、密教論義の充足化が進んだ。従来、東密の密教論義は、南都教学からの影響で実施されるようになったと指摘されてきたが、現存する南都の論義資料にもとづき、その影響を実証的に裏づけるような考察はほとんど行われてこなかった。

そこで、鎌倉期における東密教学の活性化、すなわち論義の新たな実践が三論宗の論義と連動しながら、次第に形成された実態を探尋することにした。具体的には、三論と密教を究めた碩学として知られる真空〔定兼〕(1204~1268)が「法勝寺御八講」へ出仕していた事実に着目し、真空の学的傾向が弟子である頼瑜の動向にどのような影響を与えたのかを検証することを目指した。

3. 研究の方法

研究の方法は、以下の4点に大別される。

(1), 東大寺の尊勝院宗性(1202~1278)が144年間(1131~1274)にもわたる法勝寺御八講での論義を収集・書写した『法勝寺御八講問答記』17帖から、三論宗の論題をすべて抽出して、他の三論宗関連の論義資料との関係性を精査する方法をとった。この研究を推進するためには、東大寺が所蔵する宗性や三論宗に関連する諸文献をできる限り収集する必要があり、研究期間中には東大寺調査を4回実施し、写本の解読を行った。

(2), 東大寺で真言院・新禅院の再興に尽力した聖守(1215~1287?)先導により、門下の聖然(?~1312)が撰述したとされる、三論宗の論義の集大成である『恵日古光鈔』10帖を解読し、教理的な問題意識を精査するとともに、他の三論宗関連の論義資料と比較考証する方法をとった。具体的には、院政期に活躍した三論宗の学僧である珍海(1092、一説1091~1152)や頼超(生没年未詳)等の著作類や『法勝寺御八講問答記』に収録される三論宗の論義と対比を行い、論点の整理や影響関係等を探究した。

(3), 勸修寺法務寛信が筆録した、身延文庫蔵「大乘義章抄」13帖の継続的な解読と翻刻を行い、論義内容を具体的に検証する方法をとった。この基礎作業を行うことにより、上記した『法勝寺御八講問答記』や『恵日古光鈔』等の重要文献と対照研究することがはじめて可能となった。

(4), 聖守と同時代に活躍した真空〔定兼〕に着目し、弟子である頼瑜との思想的関係性を究明する方法をとった。具体的には、『法勝寺御八講問答記』や『恵日古光鈔』等の諸文献から、真空が三論宗の論義に精通していた実態を明らかにし、真空 頼瑜の師弟間で真言密教は勿論のこと、三論教学、すなわち吉蔵や慧遠の各教説も伝法され、それを素地として東密論義が醸成された可能性が高いことを論証した。

4. 研究成果

上記の4点の方法にもとづき、論義関連資料の博搜と調査を進め、その成果を学会発表や論文にて公開した。本研究課題の成果の要点は以下のとおりである。

(1), 『法勝寺御八講問答記』所収の三論宗関連論義(『印度学仏教学研究』69巻2号、2021)

本稿では、『法勝寺御八講問答記』に収録される三論宗の論義をすべて抽出して、その特色について検討を加えた。同書を精査した結果、三論宗の論義が320題収録され、その中で慧遠に関連する論義が127題も存在し、吉蔵に関連する論義(77題)よりも多いことが判明した。さらに、慧遠に関連する論義が、身延文庫所蔵「大乘義章抄」に収録される論義と一部共通している事実を指摘した。以上のことから、慧遠の学説に対する精緻な研究が寺内法会の枠を超え、南都北嶺間にまで浸透していた一面を明らかにすることができた。

(2), 「吉蔵撰『大般涅槃經疏』関連の論義について 東大寺図書館蔵『恵日古光鈔』を中心に」(『印度学仏教学研究』71巻2号、2023)

本稿では、『恵日古光鈔』に収録される、吉蔵撰『大般涅槃經疏』に関連する論義に焦点を当てた。その目的は、第1に『大般涅槃經疏』が逸書であり、『恵日古光鈔』に引用される多数の逸文を抽出すること、第2にその逸文を解読することにより、三論宗が『大般涅槃經疏』に依拠して、どのような論義を行っていたのか解明すること、という2点にまとめることができる。

先ず、『恵日古光鈔』の論題数を改めて精査した結果、総数が240題となり、永村眞氏の誤謬を修正した。次に、『大般涅槃經疏』の引用状況を検証したところ、59カ所の引用が抽出され、その中、34カ所が完全な逸文であることが判明し、平井俊榮氏の研究を補遺することができた。さらに、その逸文を典拠とする論題は、院政期に活動した珍海や頼超の著作類にまで遡求できるものもあり、連綿と学修されていたことを指摘した。

また、『法勝寺御八講問答記』と対比することにより、南都北嶺が異なる典拠によりながら、同様の論義を展開している事例を提示した。以上のことから、南都北嶺で議論の共有化が進んでいた様相を明らかにすることができた。

(3), 身延文庫蔵「大乘義章抄」翻刻研究

同抄の翻刻は、既に「二種生死義」の翻刻研究(『日本における『大乘義章』の受容と展開 附 身延文庫蔵「大乘義章第八抄」所収「二種生死義」翻刻』『地論宗の研究』国書刊行会、2017)を提示していたが、継続的に「大乘義章第九抄末」所収「一乗義」、「大乘義章第八抄」所収「四有義・四識住義・四食義・五陰義」、「大乘義章第八抄」所収「六道義・八難義・十二入義・十八界義」、「大乘義章第九抄末」所収「滅尽定義・二種莊嚴義・二種種性義・証教二教義」という翻刻研究を『日本古写経研究所研究紀要』で公開した。これらの作業により、「大乘義章第八抄」九義科と「大乘義章第九抄末」五義科の全翻刻が完了した。

一連の翻刻研究で判明した最も重要な点は、上記した『恵日古光鈔』に「一乗義」からの引用が検出されたことである。この事実より、東大寺新禅院、すなわち聖守周縁にて「大乘義章抄」を活用していたことがはじめて立証された。

従前の如く、「法勝寺御八講」を含む諸法会の議論は「大乘義章抄」に所収される論義を基盤としていることが推察されるのであり、同書を基本文献として定置し翻刻研究を継続していく意義は極めて大きいと考える。

(4), 「東密論義と南都教学 三論宗との関係を中心に」(『日本仏教と論義』法藏館、2020)

本稿では、三論宗と関係が深く、頼瑜の師であった真空〔定兼〕に焦点を絞り、真空 頼瑜と

いう師弟をとおして、東密学派で『大乘義章』がどのように学究されたのか考察を加えた。その結果、真空による『大乘義章』の談義が木幡観音院で開筵され、それを聴聞した頼瑠が『義章八識義愚草』3巻（所在不明）をとりまとめた蓋然性が高いことを示唆した。こうした頼瑠の姿勢は、院政期に高揚した、三論宗における『大乘義章』研学の系譜を連綿と受け継ぐものであると言える。さらに、このことを論証するために、真空が遁世前に出仕した諸法会を可能な限り一覧化し、「法勝寺御八講」に照準を絞って、その学修の一端を提示した。

以上のことから、真空 頼瑠という師弟間で、真言密教の伝授だけでなく三論教学が積極的に伝法されていた様相がより明確となった。また、東密論義が醸成されていく過程を考査するうえで、南都教学や論義に精通していた真空は、頼瑠にとっていわば結節点のような役割を担い、大きな影響を与えた可能性が高いことを指摘した。

以上、本研究課題の目的・方法に対する成果は、先行研究を咀嚼したうえで未開拓であった領域に光を当てたものであり、研究代表者はその成果にもとづいて『中世日本宗教史』（全6巻、春秋社）に「三論宗の論義（仮）」という題目で執筆する予定となっている。今後も、本研究を推進していくために写本の博搜や解読等の基本作業を継続的に行っていく必要があり、新型コロナウイルス流行により中断した聖教調査も適宜再開したいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 田戸大智	4. 巻 71巻2号
2. 論文標題 吉蔵撰『大般涅槃経疏』関連の論義について 東大寺図書館蔵『恵日古光鈔』を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 525-530
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田戸大智	4. 巻 8
2. 論文標題 身延文庫蔵「大乘義章第九抄末」所収「滅尽定義・二種莊嚴義・二種種性義・証教二教義」翻刻	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本古写経研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田戸大智	4. 巻 7
2. 論文標題 身延文庫蔵「大乘義章第八抄」所収「六道義・八難義・十二入義・十八界義」翻刻	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本古写経研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 7-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田戸大智	4. 巻 69巻第2号
2. 論文標題 『法勝寺御八講問答記』所収の三論宗関連論義	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 64頁～69頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田戸大智	4. 巻 第6号
2. 論文標題 身延文庫蔵「大乘義章第八抄」所収「四有義・四識住義・四食義・五蘊義」翻刻	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本古写経研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 15頁～24頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田戸大智	4. 巻 第5号
2. 論文標題 身延文庫蔵「大乘義章第九抄末」所収「一乘義」翻刻	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本古写経研究所研究紀要	6. 最初と最後の頁 37頁～44頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田戸大智
2. 発表標題 吉蔵撰『大般涅槃経疏』関連の論義について 東大寺図書館蔵『恵日古光鈔』を中心に
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第73回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田戸大智
2. 発表標題 『法勝寺御八講問答記』所収の三論宗関連論義
3. 学会等名 日本印度学仏教学会 第71回学術大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 楠 淳澄、野呂 靖、亀山 隆彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 628
3. 書名 日本仏教と論義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------